



彼は言った。

ぼくの心が動いたときに、ぼくの仕事が始ると。

だからといって、彼にどんな方策があったわけではない。

ただ、“沢木耕太郎”という自分を晒して彼等に向かうしかなかった。

“自分というレンズ”すべてはその精度に掛かっていた。

そして、興味のおもむき方に。

ときには、対象とシンクロしすぎて、深く傷ついたり、

ときには、おもいがけない喜びに全身を震わせたり、

静かなピアノの旋律を聴くように耳をかたむけることもあった。

だが、面白かった。

スポーツマンもヨットマンも、テロリストも政治家も、

そして詐欺師の老婆でさえ。

人が現われ、何事かを彼に伝え、そして消えていく。

書き残したことも多くあった。

10年後、30年後に再び書き継ぐこともあった。

何十年後にふと、彼等の話を録音したテープの箱をひっくりかえし、

その人の肉声を探す。

たとえば「美空ひばり」。その場のすべてが逐一甦ってくる。

話されたものだけでなく、彼女自身のかすかな呼吸に含まれていたもの、

ふとした仕草に隠されていた迷いなど。

あれを自分は書くことができたのだろうか。

そして、彼の心に写り、刻印されたものが彼を手招きする。

永遠につながる微笑を浮かべ、「もう一度だけ会って」と。

それから、彼はおもむろに立ちあがる。

もう一度、旅の扉を開けるのだ。



炎の編集長
arc 創刊 10 周年
記念インタビュー

沢木耕太郎に聞く、 沢木耕太郎の世界